

1996. 11. 15.

朝日新聞

# 低学年ほど国語が苦手

## 民間の研究会が小学生など調査

授業中の子どもたち。国語に苦手意識をもつ子は少なくない（写真と本文は関係ありません）



小学生は低学年ほど「国語は苦手」と感じ、高学年ほど人前の発表や作文は嫌い。現在の国語教育が、子どもや親、教師たちにとり受け止められているかを、民間の研究会が報告書にまとめた。この研究会の代表で作家の井上ひさしさんは「文部省の指導要領などの方針がはっきりしていないという問題点も浮き彫りになった」と指摘している。

### 高学年は作文・発表嫌い

#### 表現力より理解力の重視を

調査を実施したのは、出版社の編集者などをつくる「現代子ども国語表現力研究会」。首都圏の小学校児童約四千人と、その保護者約三千人、小

#### ■好き嫌い

小学生に「一番苦手な科

学校の教師約二百人を対象にアンケートした。

目」を聞いたところ、小学三年生では七科目中、国語が一位で、一、二年生では二位だった。ほかの学年は、四年生が四位、五年生三位、六年生が五位と、低学年で国語の苦手意識が強かった。男女別では、全学年とも「苦手」は男子が多かった。

「作文」や「漢字を覚える」など、読め書きや表現活動、十項目について、その「好き」「嫌い」も聞いた。学年全体では、「作文を書き」こと、「みんなの前で発表」たのはそれぞれ四〇％台と低かったの比べ、「友だちとおしゃべりする」「テレビやビデオを見る」は、ともに「好き」が九〇％を超えた。「作文」と「発表」は高学年になるほど嫌う傾向が強い。保護者で、小学生のころ国語が「好きだった」「得意」と回答した人はいずれも調査対象者の過半数を上回り、現代の子どもの国語を嫌う傾向とは対照的だった。だが、現

在は、「二カ月間に一冊も本を読まない」という人が三〇％以上、「日記を書く」「手紙をよく書く」人が少ないなど、読む読め書きに接する機会は少なかった。

#### ■教師と親

一方、教師に指導するのが「得意」「苦手」な教科（複数回答可）をそれぞれ選んでもらったところ、数学を「得意」とした教師は約六〇％と高く、逆に「苦手」は二％と低かった。国語は三五％の教師が「得意」と答えた一方で、「苦手」も二五％いて、国語は教師により、得意、不得意の意識がはっきり出る教科となっているようだ。

保護者と教師に、子どもにとって将来も重要だと思う知識や能力を選んで（複数回答可）もらう質問には、保護者、教師ともに「人の話を聞く能力」「読解力」など理解力に関する能力を挙げた人が多かった。

逆に「作文力」「説明力」「ユーモア」など表現力に関する能力を重要と見る人は少なく、保護者、教師ともに理解力に重点を置くべきだと考えていた。

また、現在の国語教育について自由意見を述べてもらった。教師からは「（授業の中で）めざすものが多く、焦点がぼやけている」「細かい点まで読解を要求され、読むことへの興味・関心を失いがち」、保護者からは「正しい言葉遣いを教えてほしい」「（授業の）進み方が速すぎる」などの意見が目立った。今回の調査結果について、井上ひさしさんは報告書の中で「先生が何を教えるかはっきりしていないから、学校側が子どもたちを国語嫌いにさせているのではないかな。私の作品が（試験の）問題に使われるが、作者の私には絶対に解けない。だから、書かない人が解けるわけがない。国語は母国語の力を鍛えるためにある。そのためには代表的な文章を二つ、三つ暗唱したりして、読め書きを養い、自分が何を見たかを言葉にする力をつける勉強をさせるべきだ」と語っている。